

病理形態学で疾病を読む Rethinking Human Pathology

井上 泰 著

＜書評者＞ 清水誠一郎（公立昭和病院部長・病理診断科）

いささか乱暴ながら、世にいう理系をヒトとモノとの関係論、文系をヒトとヒトとの関係論と分類出来るなら「決定版！ 文系の病理学！」。これが私の考えた本書のキャッチフレーズです（著者も出版社も絶対に受け入れないとは思いますが）。また、日本語で文系の学問といった場合、文学、哲学、政治学、法学、経済学、心理学など、多様な学問・（一部の）芸術が含まれ、いい換えれば叙情的なもの、合理的なもの、あるいは科学的思考法までが含まれますが、そのすべてが本書にはあります。

本書の対象は、生身の全体としての人間であり、そこから説き起こされる、医師をはじめとする医療従事者と患者との、ヒト対ヒトの関係論です。厳密な臨床医学的な記述、肉眼所見とルーベ所見を中心としたきれいな病理形態写真とその的確な説明、豊富な文献渉猟とそのユニークな紹介、著者の手による（かわいい、失礼！）イラスト、果ては小説化などで多彩に描かれています（もちろん最新の分子生物学などの成果も多数取り入れてあります）。本書の腰巻には「推理小説を読んでいるかのような病理学！」とあり、ネタば

れになるので内容に触れることができませんが、「診断にいたるプロセス」はまさに名探偵の謎解きを思わせるスリリングなものであり、著者の明敏で合理的な頭脳を反映しており、一方、通常の病理学の本では触れられることのない患者さんの心の裏の奥にまで踏み込む描写、分析があり、これは後期エラリー・クイーンを描く1人の人間として悩む名探偵のごとき著者の姿を彷彿とさせられます。

本書は、1991年より始まり昨年135回を数えた東京厚生年金病院におけるCPCを土台にして書かれており、もちろん、NEJMに掲載されるMGHにおける記録のごとく、豊富なレファレンスとともに正統な学術書・病理学教科書として読むことが可能です（本書のサブタイトルはRethinking Human Pathologyです）。著者は医師としては私の先輩ですが、病理医としてはほぼ同じ年月を過ごしてこられています。本書読後にこのような浩瀚（本書にぴったりの表現と思います）な書物を書くことができた著者に心から尊敬の念を抱くとともに、同じ年月を過ぎて不勉強・無自覚このうえない自分（なにしろ引用されている文献をほとんど読んだことがない！）を思う

と赤面するしかありませんでした。

他者を単なる手段としてではなく、また、目的として扱えというカントの倫理を持つ絶対的に自由なヘーゲルの精神が書いたとしか思えない「はじめに」からの少し長い引用を最後にお許し願いたい。これを読んで本書を読もうと思わない人はいないだろう…。

「医療行為は、思いもよらず具体的な病気に見舞われた一個人との出会いから始まる。これは、おそらく間違いのないことだろう。その診断と治療を直接担う医師にとって、とりわけこの事実は明瞭であり、しかも、この厳しい現実から放射される多義にわたる訴えと共感、そして怒りから、その担当医師は我が身をそらすことはおそらくできないだろう。だから医師を生業とすることは端から重く辛いものであり、そのような宿命を背負っている。と、筆者は思っている。このように医師の存在を定義するとき、医師は何を以て自らの幸せを考えるのかという、いわば、人間としての当然の要求と目的、強いていえば自らの矜持の有り様を模索せずにはおれまい。銭には変えられぬその矜持を持ちたい。そのような思いが、この書物を書き刻む筆者の根底にある。」

●B5 頁 352 2009 年
定価 8,820 円
(本体 8,400 円 + 税 5%)
[ISBN978-4-260-00741-2]
医学書院 刊